

院展と或る女流画家の思い出

今年も新春を彩る院展「岡山会場」が一月二日から十四日迄開かれ大勢の人々で賑わっていた。私も出かけた一人である。

院展は日本美術院が主催運営している日本の公募展覧会であるが、東京美術学校長の職を退いた岡倉天心が大学の上に大学院があるように美術学校に於いても美術院の設置が必要であるとの考えから設けられたものであり、全国各地を巡回してをり郷土作家の入り、作品も見ることが出来たが、院友松下淳子^{あっこ}の作品をもう見る事が出来ないのは寂しい限りである。

所で、二年前の平成二十三年十一月瀬戸内市立美術館で松下敦子回顧展が開かれ松下亀能氏のご案内を受け出かけた。院展入選作品を含め初期から絶筆までの作品を見る事が出来た。松下敦子が絵筆を執ったのは三十歳を過ぎてからで若くして亡くなった長男への鎮魂の思いが込められてをり、ひたすら描く事

に打ち込み「命とは何か、祈るとは何か、生きるとは何か」を胸に精進し院友として又岡山の日画家の重鎮として活躍したが平成十七年逝去した。(回顧展パンフレットより) 私が画家としての道をひたすら歩んだのを知ったのはずっと後日で、入選した力作を見る楽しみの院展であつたが残念でならない。

個人的な事になるが、昭和二十年六月二十九日の岡山空襲で焼け出され母の実家の倉敷市真備町に落ち延びた先が私より二歳若い従妹にあたる敦子の生家であつた。短い田舎暮らしであつたが色々な事が懐かしく思い出される。去年生家を訪れたが玄関に絵が掲げられていた。尚倉敷市立美術館へ寄贈された絵を見る機会を持つ度に短い生涯が惜しまれる。改めて冥福を祈るばかりである。

初雪を見上げる空の昏さかな 英一郎